

# かせかけ

編集 沖縄県立看護大学  
広報・情報委員会  
発行 平成16年8月1日



成人保健看護方法Ⅱの臨床看護技術演習

## 目次

- ナーシングリーダーシップ会議…………… 2
- The 17th Annual Pacific Nursing Research Conference に参加して …… 6
- 地域保健看護…………… 3
- 大嶺千枝子教授 退職記念講演 「米国民政府令による沖縄の看護教育の特徴」… 7
- 教員紹介(よこがお) 吉川千恵子…………… 4
- 8人の社会人院生を迎えて …… 8
- 「人の一生とメンタルヘルス ―ストレスとともに生きる―」…………… 5
- 大学院入学生からのメッセージ…………… 9
- 教職員の動き…………… 10・11



## ナーシングリーダーシップ会議

### －新たな地域保健看護の確立にむけて－

学長 上田 礼子

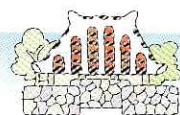
平成16年3月11日に本大学において米国バージニア大学看護学部長Jeanette Lancaster, PhD, RN, FAANを迎えて第5回ナーシングリーダーシップ会議が開催されました。折り悪しく年度末のことでもあり、後期入学試験および、文部科学省科学研究費によるNurse Education Competency Project (15年度)のまとめ、さらに2回生の卒業式(13日)とも重なり、大学は教職員・学生を含めて大変に多忙を極めました。しかし、それぞれの教職員が役割を分担し大過なく遂行することができ、“目標・計画”が明確に設定されれば大きな事業も実行できることを経験したのではないかと考えています。すなわち、過去のリーダーシップ会議開催の経験から実行委員会はプログラムを作成し、実施し、結果として次のような成果が得られました。

1) Dr. Lancasterによる特別記念講演の開催: 参加者は第2回卒業予定者を含む本学学生・教員ばかりでなく、保健所や病院で保健師・看護師として働く職員、他大学の教員も含む約154名が参加しました。博士は各国においてpublic health nurseが今日必要とされる理由から話し始め、時代とともに変化する役割とその5つの特徴を述べました。①集団に焦点、②地域で活動を展開、③健康と予防に焦点、④看護支援は地域あるいは集団レベル、⑤population/communityの全ての人、特に弱者を対象とする健康に関わるなどです。具体的に健康教育の例をあげながら、公衆衛生機能の核となる評価、政策の開発、保証などについて述べ、看護実践、看護教育の課題に対処する方法と多職種間アプローチの必要性を強調し、結論としてessential public health serviceの10項目を提案しました。豊かな実践と教育経験に裏づけられた話し方に聴衆から質問が続出しましたが、短い時間

内での回答には疑問も残ったようです。

2) その他のmeetingなど: この2日間に学生とのmeetingおよび精神保健看護領域、地域保健看護領域の教員とのコンサルティション、competencyプロジェクトの相談役などを精力的にこなし、卒業式の当日に沖縄を離陸し、機上の人となりました。私は大学の責任者として許す限りDr. Lancasterと行動を共にし、学生および教職員が国際人として行動するDr. Lancasterから学ぶことが多かったと感じています。学生とのミーティングでは、口を開かない学生を上手に誘導して発言の機会を与え、教員とのコンサルティションでは自らの教育や実践例を提示しながら新しい地域保健看護の方向が現場の課題解決から生まれてくること、competencyプロジェクトでは米国もこの領域で種々の試を行っていることなどを話して我々の仕事の将来に向けた期待を抱かせるものでありました。competency projectに参加した教員の1人は『日本の学会に出席したよりも多くの刺激を得た』と私につぶやいていたことが印象的でした。グローバル化時代にあっても世界的リーダーを直接コンサルティションのために招へいするのに資金が必要であり、招へいされたリーダーからできるだけ多くのものを学ぶには我々の日常的学習の積み重ねが必要であることを感じとられたはずであります。

私のできることは質の高い学びの機会をなるべく多くつくること、招へいの資金を準備することなどありますが、学ぶのは学生・教職員の方々であることを老婆心ながら述べておきます。最後に本学の後援会と15年度文部科学省科学研究費からの経済的援助に対して感謝を申し上げます。



## 地域保健看護



地域保健看護学では、人々の生活を支えている地域のヘルスケアシステムと看護の機能について学習をする。人々が健康な生活を営むために、個人・家族・地域社会・国はどのような努力をしているか、責務をもとめられているか、そして看護職にはどんな役割を期待されているか、地域保健看護の実践方法と基本技術とはなにか、学生にはこれらの学習課題を地域保健看護概論、地域保健看護方法Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、島嶼保健看護論および沖縄県内の保健所や市町村での実習体験をとおして学んで欲しい。

地域のヘルスケアシステムと看護活動の成り立ちには、地域の地理的条件、産業経済、生活と文化の歴史を反映した特徴がみられるが、これは看護学教育においても同様で、本学は離島の演習を伴う島嶼保健看護論という他大学にはみられない科目を開設している。

地域保健看護学は、保健師養成の歴史の中で発展してきたが、現在はヘルスプロモーションの一端を担う看護職に必修の学習領域として大学の看護学教育に組み込まれている。

近年、我が国では保健・医療・福祉分野の連携が進展し、ヘルスケアの多様化とともに看護職が活躍する場が急速に拡大している。学生には国内外の看護職の創意工夫から生まれる地域看護実践の考え方を学んで、看護の新たなチャレンジに必要な能力を開発して欲しいと願っている。

保健師の国家試験受験するために、地域保健看護学は必修の学習科目であるが、関連の公衆衛生学、環境保健学、疫学、保健統計、社会福祉論等も同様であることを心に留めて欲しい。

地域保健看護学の教員は、地域の人々の暮らしに限りない愛着と関心を寄せているメンバーである。

地域保健看護学を担当している教員の研究分野

### ◆ 宮地文子

子ども虐待予防と子育て支援に関する研究  
地域ヘルスケアシステムの充実・開発に関する研究

### ◆ 川崎道子

地域住民の生活習慣・保健行動に関する研究  
子育て支援ネットワークづくりに関する研究

### ◆ 牧内忍

乳幼児の齲蝕予防に関する研究  
生活習慣病の予防のための保健活動に関する研究

### ◆ 呉地祥友里

高齢者の地域保健看護に関する研究

**教 員 紹 介** (よこがわ)

学生部長兼教授  
吉川千恵子

前学生部長加藤尚美先生の後任として、4月にその任を受け数ヶ月が経過しました。これまで歴代の学生部長が築いてこられた「21世紀における新たな大学づくり」を継続し発展させていく一翼を担うことに重責を感じますが、教職員や学生と共に学生の立場に立った大学づくり、魅力ある大学づくりに貢献したいと考えております。

開学6年目を迎えた本学は、4月から学部教育のうえに大学院前期課程(修士)、後期課程(博士)を設置し、看護教育・研究・実践の最高学府の場として発展しつつあります。このことは、在学生にとっても卒業生にとっても、また、看護職として社会に貢献している看護関係者にとって、将来への夢と希望をつなぐ学術の場が出来たこととなります。21世紀の保健医療福祉に貢献できる人材の育成が内外ともに期待されております。

さて、在学生にとっては、大学生活を如何に過ごすか、長い人生のわずかな4年間ではありますが、人生の設計を左右するといわれている期間でもあります。目標に向かって学生生活を有意義に活かしてほしいと思います。

最近読んだ「人間の魅力」という訳本に「す

べてを変える魔法の力“熱意”」についてこう述べています。「偉大なことで熱意の力なしで成し遂げられたものは一つもない。熱意とは、明かりをともし発電機のようなもので、人間を動かし、偉大な業績へと導くものである。眠っているエネルギー、才能、活力を揺り起こし、目標に向かって突進させる力であり、内からあふれ出る力である」。さらに車にたとえてこうも述べている。「あなたの車のアクセルを踏み込んでみなさい。すぐに力がついて高速道路をすべり出すだろう。熱意も同じである。熱意は動力である。あなたの考えはアクセルである。心はガソリタンクである。アクセルを踏む前にガソリタンクを一杯にしてアクセルを踏もう、そうすると熱意があなたを駆り立てるのが感じられるであろう」。私達は、活気に満ちたファイトあふれる人を羨ましく思うことがある。きっと自分創りに努力している人であろう。作物もどんなに気候に恵まれていても、肥料を与えなければ育たない。同じように人間性も肥料がなければつくられない。内面で形つくられるものが、外に現れてくるとよくいわれる。人間は一生成長するために、自分創りが必要だといわれる。4年間の学生生活で自己の成長と専門職業人としての基盤をしっかりとつけていこう。学生部では、学生が学生としての能力が発揮できるよう、健康・修学・進路相談をそれぞれの担当教員と職員が行っております。また、学生の自主的活動を支援するための顧問教員制度や活動費を支援している後援会があります。大いに活用して頂きたいと思います。

そして、一人一人の学生の力と教職員の力が調和し魅力ある大学、活力ある大学へと発展することを願うものであります。

## 「人の一生とメンタルヘルス—ストレスとともに生きる—」

平成15年度連続公開講座を終えて

研究・研修委員会前副委員長 岡村 純



平成13年度より開始された本学の連続公開講座も15年度で第3回目を迎え、熱心な参加者を得て、地域に定着しつつあります。3年間のテーマを振り返ってみますと、「健やかに老いる」(13年度)、「沖縄諸島における生活と健康」(14年度)、「人の一生とメンタルヘルス—ストレスとともに生きる—」(15年度)で、沖縄県民の健康の現状と時宜性を考慮しながらも、本学の設立理念であります「人々の健康と福祉への貢献」と教員陣の構成を反映するものとなっています。

ところで、公開講座のテーマがどのようなプロセスを通じて決まってくるか、ご存知でしょうか。これには、受講生の皆さんからの貴重な

ご意見が反映されています。講座の最終回に実施する簡単な質問紙調査から、今回の講座で「どのような点が役に立ったのか」、「今後、どのような内容を希望するのか」を参考にします。さらに、毎年、学内の教員からも公開講座として希望するテーマと講演可能なテーマを提出してもらいます。そして、研究・研修委員会が、これらのデータを連続性のある一つのテーマとして練り上げることとなります。

さて、15年度の講座は、表のように6人の先生方に担当していただきました。人間は一生を通じて、胎児期、乳幼児期、学童期、青年期、壮年期、老年期とそれぞれのステージで特有のストレスに曝されることとなりますが、うまく適応して、ストレスとともに生きていく、というのがテーマの趣旨でした。

全回参加者には皆勤賞として、「公開講座受講証明書」を差し上げていますが、今回は55人の参加者中6人が皆出席を達成し、うち1人は3年間連続皆勤賞の快挙を成し遂げています。最終回には次の講座は「いつから始まるのか」という問い合わせが多く、友達同士で受講する人も増えており、地域に定着しつつあることがうかがわれます。

回数	演 題	講師(所属)
第1回	お産への準備と適応 —あなただけのお産体験へ、からだところの能力全開!—	園生陽子(本学母性保健看護助教授)
第2回	小中高生のメンタルマネジメント	宮城政也(本学保健体育講師)
第3回	戦争によるPTSDとトラウマ	當山富士子(本学精神保健看護教授)
第4回	中高年期の適応とメンタルマネジメント	田場真由美(本学精神保健看護助手) 伊礼優(本学精神保健看護助手)
第5回	人間関係におけるストレスと癒し	渡久山朝裕(本学臨床心理学講師)

※所属は、講演時のものです。

## The 17th Annual Pacific Nursing Research Conference に参加して

成人保健看護 仲宗根 洋子 / 吉川 千恵子 / 新垣 利香



2004年3月19日・20日の2日間ハワイホノルルのヒルトンビレッジにおいてThe 17th Annual Pacific Nursing Research Conferenceが開催されました。

この学会はハワイ大学マノア校の看護学部、トリッパー軍医療センターが主催し、メインテーマは“Addressing Issues in Health Care Disparities through Research and Practice”（研究と実践による健康管理の不一致における問題提示）でした。研究で得た知見を分かち合い、臨床家が研究の成果を利用することが焦点でした。1日目はワシントン大学の看護学部長Bobbie Berkowitz氏によるKeynote Addressの他2つのWorkshopとHealth Belief, Peds/Adolescent Prevention, Complementary/Alternative, Mental Health, Nursing Systems, Community/ Workforce, Women's Healthの6つのセッションに18の口演、そして11のポスターセッション、Plenary Sessionsがありました。2日目はジョンホプキンス大学看護学部の助教授によるKeynote Addressの他2つのWorkshopとPlenary Sessions, Substance Abuse, Nursing Education, Decision-Making, Older Adult, Adult Health, Physiological Measureが1日目同様に行われた。その中で印象に残った発表はProstate Cancerに関する知識と信条について45歳以上のアフリカンアメリカ軍人を対象にバン

ドラのセルフエフィカシー理論にもとづく研究内容でした。また同様にスクリーニングを始める年齢についての研究など前立腺がんの問題が注目されていました。その他CNSによる高血圧の管理の介入研究など興味深い発表がいくつもありました。ワークショップでは、コミュニティを動員したケーススタディやツールの開発に関する内容があり、語学が十分でない事が情けなくなりました。

私にとって、初の海外での学会発表でしたので、日本の学会と比較してすべて感動的でした。発表者と聴衆が非常に近く、活発な論議がされる一方で会場はリラックスした雰囲気でした。またContinental BreakfastやBreak timeの果物、飲み物、ケーキ類のサービスが十分に準備され、Breakしながらの交流もセットされておりました。ランチタイムは、テーブルセッティングができており、そのテーブルで隣り合わせの先生方と交流できたこと、また日本から参加しているすべての先生方と友好的に交流ができたことは学会発表以上に大きな成果でありました。日本からは、沖縄県立看護大学、三重県立看護大学、高知大学と日赤看護大学からそれぞれポスターセッションやPodium presentationで参加しておりました。またハワイ研修で旧知のハワイ大学・カワイ大学の先生方と吉川先生の再交流があったことも記して起きたいと思います。

学会終了後、ハワイで実際にテレナーシングを実施しているパシフィック大学のミッシイー先生を訪ね、ハワイでのテレナーシングの実際をみることができたことも我々の研究の幅が広がりました。その仲介者は日本からハワイ大学博士課程コースに留学中の学生で、帰国後メールで交流が続いているなど副産物がたくさんあります。初めての海外における学会発表までのプロセス（学会の申し込みから採用決定通知、レジメの提出等、学会費の支払い）・・・そして現地でのプレゼンテーションまでを振り返ると、さまざまな学びがあり今後も機会を得て続けていけたらと考えております。

(文責 仲宗根洋子)

## 大嶺千枝子教授 退職記念講演 「米国民政府令による沖縄の看護教育の特徴」



前地域保健看護教授  
大嶺千枝子



春の訪れを感じる2月17日、行政・学校関係者等115人の参加のもと演題「米国民政府令による沖縄の看護教育の特徴」の講演が行われた。

内容は、五話に構成され当時の写真や史料を活用し具体的に紹介された。

第一話は看護教育変遷の概要・沖縄の看護の基礎を築いた指導者、第二話は看護教育の特徴、第三話は看護関係法と教育(米国民政府布令の特徴、布令から民立法化、看護の本土化)第四話は琉球大学との教育提携(単位取得・委託制度)、第五話は教育スナップの内容で進められた。

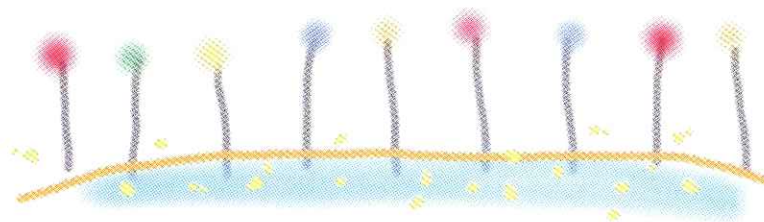
看護教育の特徴では、終戦から復帰前の沖縄県の看護教育を創設期、確立期、充実期、本土化の4期に区分し特に創設期・確立期は、終戦による廃墟の中、QHGによる「かまぼこ校舎」での教育がスタート、その後米国民政府布令による看護婦養成学校法制定後、本格的な教育が開

始された。その頃より本県の看護教育に影響を与えた指導者ワニタ・ウォーターワーズ女史による琉球大学と看護学校が提携して単位認定制度・委託制度が開始され19年間で84人が終了した。その後、終了者は、看護教員等要職につき活躍したこと等より、制度は将来の看護職者の人材育成・資質向上を視野に入れた先進的かつ革新的であったことが理解できる。

本県の米軍統治下における看護教育の変遷を再確認し、本土と異なった県独自の看護教育が展開されたことを伺い知る機会となった。

これまでの大嶺教授の功績を讃え今後の健康と御多幸を祈念するとともに、講演内容を後進へも伝えるべく著書として執筆して頂けることを願い会を閉じた。

(文責 川崎道子)



## 8人の社会人院生を迎えて —沖縄県立看護大学大学院第1回入学式—

大学院教務委員会副委員長 岡村 純



平成16年4月7日に举行された本学看護学部第5回目の入学式は、沖縄県における看護教育の歴史に新たな1ページを刻むものとなった。看護学部に入学を許可された80人の名前に続いて読み上げられた8人には、昨年卒業した学部の1期生がそうであったように、沖縄県立看護大学大学院保健看護学研究科博士前期課程、博士後期課程の1期生として、大学院の歴史と学風を創り上げていくことが期待されているのである。

博士前期課程6人、博士後期課程2人のすべてが在職したままでの社会人入学であったことは、全くの偶然ではない。文部科学省が「大学院休業修学制度」など、社会人の大学院入学を推進しており、学部教育よりも大学院教育に重点をおいた大学院大学の一部では、同じ学力ならば学部の新卒業生よりも社会人を優先する傾向も出てきている。このような動きの背景には、複雑化する現代社会が現場の問題を解決する、より高い能力を求めており、複雑な問題を科学的、研究的に解明していく指導能力を必要としているからである、と考えられる。

本学の博士前期課程は「学部における一般

的並びに専門的教育の基礎のうえに、広い視野に立ってより高度な専門的知識や技術を修め、保健看護における理論と応用の研究能力を養うこと」、博士後期課程は「独創的研究によって、従来の学術水準に新しい知見を加え、文化の発展に寄与するとともに、専攻分野に関し研究を指導する能力を養うこと」を目的としており、前述の社会的、時代的要請にまさしく応えるものである。

在職しながら修学は簡単なことではないが、本大学院では「少数精鋭」のメリットを活かして、夜間開講や土曜日開講など、院生本位、院生ひとり一人の状況に応じたオーダーメイドのカリキュラムを試みている。社会人院生が学内にいることは学部の学生にも様々な知的刺激を与えることになると考えられ、将来的には他大学院で行なわれているティーチングアシスタント（院生が学部の授業を補助する）制度なども検討する必要があるだろう。

社会人院生の修学には働いている現場の深い理解が必須であり、現場の保健看護の質を継続的に向上させていくためには、看護師、保健師、助産師の継続看護教育が肝要であることをぜひともご理解をいただきたい。本学の卒業生、卒業予定者も、学部教育の基礎に立って、より高度なコンピテンシーを習得し、研究能力をみがくために、社会人に負けずに、大学院入試に果敢にチャレンジしてほしい。

沖縄県において初めて設置された看護系の博士後期課程と博士前期課程が、沖縄県における保健看護の質の向上の着実かつ大きな一歩となるように、教員と院生が切磋琢磨しながら大学院を運営していこうと努力しているので、県、市町村、保健医療福祉機関のより一層のサポートをお願いしたい。



## 大学院入学生からのメッセージ



沖縄県立看護大学 大学院  
博士前期課程 1年次  
大嶺 光孝

今春から、大学院博士前期課程の第一期生として入学しました。

私は市町村保健師であり、就職して4年目となります。保健師の職務は多岐に渡りますが、その中で精神保健看護活動に興味を持っており、精神障害者の生活実態や彼らを取り巻く関係職種との連携等について研究したいと考えています。

沖縄県立看護大学大学院は県内外はもとより、海外からも講師陣を招いています。エビデンスに基づく系統的学習を行うには絶好の場所・機会であり、第一期生として入学できたことを嬉しく思います。

社会人を続けながら大学院に入学することについて疑問を投げかける人もいます。しかし、大学院で学んだ知見を実践の場で応用できることは社会人学生の特権であり、有意義なことです。直接の業務改善にもつながる場合もあるため、一石二鳥です。

今年度の入学生は全員社会人で、ゼミや時間外で交わされる議論には含蓄を含んだものがあり、大変刺激になります。また、社会人学生に配慮した履修カリキュラムには院生一同、大変感謝しています。

仕事との両立はハードで、早くも睡眠時間の確保に頭を悩ませています。力量形成のため励みたいものです。学生同士切磋琢磨しながら、これからの社会人兼大学院生活を乗り切っていきたいと思っています。



保健看護学研究科  
博士後期課程  
知念 真樹

みなさん、初めまして。この4月から、博士課程後期(先端保健看護専攻)に入学した知念真樹と申します。現在、お隣の中央保健所で保健婦として仕事をしています。

私は、平成7年に大学卒業後、そのまま同じ大学の修士課程へと進みました。その時は、研究といっても自分のやりたいことというより自分を指導していた教授の研究しているテーマから、興味のあるものを選んでそれを深めていき、修士論文を書きました。その後実際就職してみると、日々の仕事の中から「研究してみるとおもしろいだろうな～」という課題にたくさん出会い、その課題を研究するために看護大学の大学院を受験しました。

私が取り組もうとと思っている課題は、僻地や離島で活動している保健師や地域で活動している保健師たちが、お互いにサポートしあえ、学習できるネットワークを作ることです。このネットワークは、インターネットのホームページなどを使って作っていかこうと考えています。どこにいても、誰でも手軽に情報が得られ、相談ができるネットの環境は、沖縄のような離島の多い地域でネットワークを作るのに向いていると、私は考えています。

研究を実際初めるまでに、やらないといけなことがまだまだたくさんありますが、実際に仕事をしている保健師の役に立つ研究になるよう頑張りたいと思います。

## 教職員の動き



教授 栗栖 瑛子

平成16年2月15日付で本学の教員に採用されました。設立6年目にして、大学院の設置という、新しい節目を迎えた本学の一員として、教育と研究の一端を担う機会を与えられたことを、私は、大変光栄に思うと共に、その責任の重さを感じ、身の引き締まる思いがいたします。微力ですが、職務に励む所存です。また、色鮮やかな花々と、美しい珊瑚礁に囲まれた亜熱帯のこの島々で、沖縄の文化を学び体験するまたとないよい機会に恵まれたことに感謝したいと思います。「よく学び」かつ、沖縄の文化と気候風土を生活を通して肌で感じ、理解してゆきたいと思ひます。皆様のご支援をお願いいたします。

くりからん、よろしく、うにげ+さびら。



教授 宮地 文子

4月に着任して、看護学科の地域保健看護学および大学院地域保健看護領域を担当しています。

私は、無医村で育ったせいか、幼い頃から人が入院生活を余儀なくするプロセスに大変関心があり、東京と埼玉で保健師の仕事と地域看護／公衆衛生看護の教育に携わってきました。

沖縄の地域保健と保健師活動の歴史には世界に誇るものがあります。そのエッセンスを看護職のみならず保健医療従事者が共有し、応用できるように微力を尽くしたいと願っています。

沖縄の暮らしと文化、保健医療の実態を学生からも教わりながら、共に真実を胸に刻み、希望を語りたいと思ひます。



教授 小林 肇

4月2日付で就任しました小林肇(いたる)です。前月の3月31日まで東京大学医学部に勤務し、学部・大学院で母子保健学・人間発達学領域を中心とした教育・研究に従事してきました。併せて、医学部附属助産婦学校、看護学校も兼任し「地域母子保健」「統計学演習」などを担当し、たくさんの卒業生たちを見送りました。また、医学部母子保健学教室在職中には沖縄の離島健診チームに参加し、宮古、石垣など何回か訪れました。おかげで本島や離島の古くからの友人・知人のみなさんが、今回の看護大学就任を歓迎してくださり、心から感謝しています。

そもそも初めて沖縄におじゃましたのは、返還直後の昭和48年頃だったと思ひますが、それ以来、沖縄の自然のすばらしさ、人々の人情の豊かさに魅かれ、ほとんど毎年訪れていました。今回の就任も、そのときから何か目に見えぬ縁で結ばれていたのかもしれません。自分自身、気持ちは若く、興味関心の塊みたいな人間だと思ひています。

共に学び、共に語り、若い皆さんの将来に何かしらお役に立ちたいと張り切っています。どうぞよろしくお願ひします。

## 教職員の様子



講師 永濱明子

4月より学校保健領域の講師として着任いたしました。「養護概説」と「保健科教育演習」を担当しています。養護教諭を目指す学生の皆さんが将来教壇に立つときに、生徒を前にしてパニックにならないような準備を一緒にしたいと思っています。アメリカでの学生経験を活かし、アメリカと日本のいいところだけを取り入れた教育をしたいと思います。学生が主役になる参加型の授業展開を基本として、「教え、育て」「教えられ、育てられる」、両方向性の教育がモットーです。

研究では、長く障がいのある子どもたちと携わり、子どもたちとその家族の生活の質向上に視点を当てております。すべての流れが早い現代社会で、どのようなサポートが必要なのかを沖縄でも研究したいと思っています。

大学を卒業してから、海外を含めあちこちを転々とし、今回の沖縄への移動は記念すべき15回目の引越しとなりました。パッキングの腕も徐々に上達し、いつでもどこへでも移動できるように最低限の生活用品を持つことにも磨きがかかってきました。16回目の引越しが遠い先であることを願っています。よろしく願いいたします。



助手 宮里智子

はじめまして。4月より成人保健看護助手に着任しました。私は大学を卒業後、循環器内科病棟で勤務いたしました。そして、院内感染に興味をもったことをきっかけに大学院へ進学しました。大学院では感染看護について学び、さらに病原細菌に関する研究に携わってまいりました。また、熱帯の国での検体採取を通し、その国の医療や実験室の現状を知るといっても貴重な経験をしました。我々は常に感染症の脅威にさらされています。狂牛病、鳥インフルエンザやSARSなど世界を震撼させたこのような感染症は記憶に新しいところでしょう。結核菌や薬剤耐性菌の広がりには医療施設内外を問わず大きな問題となっています。また、熱帯の国々では多くの人たちが今なお下痢症などの腸管感染症で命をおとしています。私はこれまでの経験を、このような現状に対応できる人材の育成と感染コントロールに関する研究に生かしたいと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

かせかけとは、琉球古典舞踊女七踊りの一つです。総とは紡いだ糸を巻く道具で、総掛けとは布を織る糸をこしらえている様子を指しています。この踊りのように丹念に糸を紡ぎ布を織って着物に仕立てていく、その一途の心と「技術」・「感性」は、「知識」の継承・創出とともに、本学の看護職者を生み育む教育・研究の原点に相通ずるものであろうと、広報誌の名称にしました。



かせと杵

## 教 職 員 の 動 き

### ●平成15年度

◎就任	教授 栗栖 瑛子	教授 安谷屋 均	助手 鈴木 香代子	
◎定年退職	教授 山口 榮鐵	教授 大嶺 千枝子	事務局長 屋良 善康	主幹兼学務係長 松島 良子
◎退職	教授 宮城 航一 助手 吉田 真美	教授 加藤 尚美 助手 新垣 利香	助教授 藤村 真弓 助手 小川 なお子	助教授 園生 陽子 助手 杉本 聡子

### ●平成16年度

◎就任	付属図書館長兼教授 栗栖 瑛子 講師 賀数 いづみ	学生部長兼教授 吉川 千恵子 講師 永濱 明子	教授 宮地 文子 総務係長 山城 正	教授 小林 臻
◎転入	事務局長 赤嶺 盛男 主任 玉城 浩治	主幹兼学務係長 屋慶名 徹	主査 當間 みえ	主査 新里 久仁子
◎転出	主幹兼総務係長 山田 浩 主事 石川 清秀	助手 大田 貞子	助手 玉代勢 良江	主任 長谷川 時子

### 編 集 後 記

2004年4月、大学院が開設され、新たな第一歩を踏み出しました。それに伴い、『かせかけ』第6号では、OPCNに新たな風を吹き込んでいる教職員や院生の動き等を載せております。今後も教育・研究をとおして地域に貢献できる大学であり続けるために、『かせかけ』もその一端を担えればと思います。皆様のご協力をよろしくお願い致します。 広報・情報委員会

## 沖 縄 県 立 看 護 大 学

〒902-0076

沖縄県那覇市与儀1丁目24番1号  
TEL(098)833-8800(代表) FAX(098)833-5133  
<http://www.okinawa-nurs.ac.jp>